

101歳の和菓子店看板娘 田谷きさみさん

(千葉県東庄町)

たや・きみ／1915年(大正4年)、三人きょうだいの末っ子として茨城県で生まれます。昭和9年に菓子職人の国蔵さんと結婚。利根川の渡船場近くにお茶やまんじゅうを提供する「福嶋屋支店」を開業します。昭和21年に夫を34歳の若さで亡くすと、女手ひとつで子育てとお店の切り盛りをしてきました。現在も、息子さん夫婦、お孫さん夫婦と一緒に「菓心あずき庵」で働いています。

々々
天顔

田谷きみ



「いらっしやい。今日は暖かいわね」

馴染みのお客さんと談笑しながら、テキパキと仕事をこなす田谷きさみさん。お土産用のお菓子を素早く包装し、レジ打ちもこなします。

「いまでもレジを打つ前に、5つ玉のそろばんを試し算をしているの。もう長いこと使っているから、これは棺桶にも入れてもらおうかしら(笑)」

一緒に働く孫の等さん(52歳)が「店の貴重な戦力」と言うように、午前8時の開店に合わせて自家製のお菓子を店頭と並べ、午後6時の閉店まで、ほぼ1日を店内で過ごします。しかし、戦後すぐにご主人を亡くされ、材料もなくお菓子をつくることができないう時代もあったそうです。

「生きていくために何でも売った、苦しい時代でした。実は20年前、孫の結婚を機に引退するつもりだったんです。でも、『辞めて何するの?』と言われて、それもそうだなって(笑)。お店に立って、お客さんとお話しているからこそ、健康でいられる。それにカウンターの裏では青竹踏みをしたり、片足上げをしたりして、足腰を鍛えているんですよ」

食事は家族と一緒にものを食べ、1日おきに、大吟醸やワインをほんの少しだけいただくそうです。「お風呂に入って、今日も無事に終わってよかったなって、ほっとする時間が好き。すると、明日も頑張ろうという気持ちになります。笑顔って言葉が好きでね、私も常に笑顔でいたいと思っています」

